

博物館学芸員実習を行いました♪

恩納村博物館では8月8日から20日まで、学芸員資格取得のための博物館学芸員実習生の受け入れをしました。今年度は沖縄国際大学から2名、沖縄県立芸術大学から1名の計3名の実習生を受け入れ、期間中、展示解説、博物館資料の取り扱い、展示作業などの実習を行いました。

今回の「学芸員のはなし」は実習生たちによる「むらのきおく100」番外編として、博物館の展示資料を紹介いたします。



←左から伊波留依さん、大内彩華さん、金城那美佳さん

展示解説実習の様子→



トゥックイ（徳利）



恩納村は焼物の原材料である陶土（白土・赤土）のとれる地域となっています。那覇市壺屋に所在する窯群では、窯屋焼と呼ばれる焼物を近世に作っていました。原材料は船で恩納村から那覇に運んでいたそうです。博物館で展示している焼物は壺屋で焼かれた壺屋焼で、今回は徳利を紹介します。

自分の家での酒入れには、焼物の徳利が使われました。荒焼きの丸っこい形が多く、その容量によってチュワカサー（一升入れ）、タワカサー（二升入れ）などと呼ばれました。

祭りなどの特別な時に使う、イシビンやユシビンと呼ばれる瓢箪型の徳利や、磁器製絵付の徳利、酒を入れて仏壇に供えるカザルクビンと呼ばれる徳利など、様々な種類があります。
(沖縄国際大学 金城 那美佳)

バサージン（芭蕉衣）



バサージンとは芭蕉の繊維で織った芭蕉衣のことで、タティアヤ（たて縞）でテカチ染めされたものが一般的なバサージンとして挙げられます。麻や絹で織った着物は士族が、バサージンは一般庶民が身に着けていました。年中バサージンを身に着けますが、冬は重ねて着ていました。明治以降に、本土からの安い木綿衣が簡単に手に入るようになってからは、冬は木綿衣を身に着けるようになりました。普段着として身に着けられていたバサージンは、新しいうちは外出着として用いられることもありましたが、古くなると仕事着として用いられていました。男性用のバサージンと女性用のバサージンは、丈の長さが異なり、女性用は少し短めで、男性用は女性用よりも長めになっています。
(沖縄国際大学 大内 彩華)

パーキ



一般に編み目の粗い筥のことで、女性の頭上運搬用具としてよく使われました。女性の運搬法には、頭に筥をのせて荷物を運ぶ方法と、背のある筥のひもを額にかけて背負う方法があります。またパーキは、昔の人の主食であったイモを洗うのに用いられたり、穀物や野菜をいれておく一般容器としても利用されていました。さらに女性だけではなく、男性が棒の両端に吊り下げて担うこともあります。このようにパーキは、かなり多角的に使われていた用具です。

私は琉球舞踊を習っており、谷茶の浜を題材にした「谷茶前」をよく踊る機会がありますが、その中に小道具としてパーキが登場します。男性がとった魚をパーキに入れ、女性が売りに行く場面を軽快なリズムで踊られます。

(沖縄県立芸術大学 伊波 留依)